


ひょうご関係人口案内所

～さとまちガイドラボ～



「里山」「街中」それぞれの
たくさんの方の“”があつまって
“あたらしいこと”が
うまれるんだ



地域再生大作戦がスタートして12年

地域再生アドバイザーが今までの取組を振り返ってみると・・・



単一の小規模集落支援から始まり、12年間で対象や手法が随分広がったと思います。この蓄積を今後活かせればと思います。

松原永季 (有限会社スタジオ・カタリスト)



「みんなの知恵で自分たちの地域の課題を解決する」12年で培って来たのはその作法なのかもしれませんね。

浅見雅之 (合同会社 人・まち・住まい研究所)



地域再生大作戦という大きな事業は全国的にもめずらしく、兵庫の誇るべき取り組みです。ぜひ、活かしていきましょう！

柏木登起 (NPO法人 シミンズシーズ)



地域総意の課題に対して、地域と外部人材が共に解決する関係人口システムをつくることはできませんか？

平櫛武 (キタイ設計株式会社)



地域再生大作戦で大学生を地域に連れて行く機会をたくさん得ました。若い力で地域を支える活動を続けていきます。



三宅康成 (兵庫県立大学 環境人間学部)

取組の成果が見えつつある一方で、活力が低下する地域は増えるばかりです。より一層、皆で頑張っていきましょう。



井原友建 (NPO法人 地域再生研究センター)

地域には独自の文化・営み・歴史・環境があります。これらを活かした元気な地域づくりがますます望まれます。



中井豊 (中井都市研究室)

ひょうご関係人口案内所の設立をめざしませんか？

多様な人材による総活躍社会の実現 里山と街中の方々が協働して、いきいきと幸働！

やりたい人、できる人が有志でチームを結成し、地域・集落の人々と一緒に地域の課題解決に立ち向かう。課題は地域ごとに違い、チームの構成も様々。あなたの力を必要とするチームがきっとあるはず。自分の知恵や経験を役立てて欲しい。自分が地域を変える一助になりたい。そんな思いをもった人々を結びつけたのが、ひょうご関係人口案内所です。

キャッチフレーズ

あなたの「やりたい！」が里山の課題解決へ

目次

- I ひょうご関係人口案内所とは 3
- コミュニティミッション(さとまち協定)を結ぼう 4
- 里山のFs調査※事例 5
- 街中のオンライン交流カフェの取組 7
- II コーディネーターの養成スクール 8

※Fs調査

フィジビリティ・スタディ調査。新規事業などのプロジェクトの事業化の可能性を調査すること。

ひょうご関係人口案内所とは

ひょうご関係人口案内所は、「里山」と「街中」を行き来しながら里山地域に継続的に関わる者※を案内し、「街中」から「里山」へのつながりを築き、新しいヒトの流れを創出することを目的としています。 ※関係人口の定義

～基本的な機能～

1. 「里山」と「街中」をつなぐ『**マッチング**』を進めます
2. 里山と街中の共通の『**コミュニティ・ミッション(さとまち協定)**』を掲げます
3. コーディネーターを派遣後、里山の希望に沿った『**外部人材**』を追加派遣します

目指すスキーム



外部人材の種類(里山協働活動人材バンク)

- ナビゲーター : イベントの進行、プログラム策定、案内調整を担います
- アンバサダー : 特定の集落、地域に絞り、大使として後方支援するほか、コミュニティビジネスの情報交換者の役割を担います
- フォトグラファー : 里山の集落地域を取材し、写真動画を撮影して、ホームページやSNSで情報発信を担います
- ボランティア : 里山の集落地域の草刈りや祭りなどの人材不足を解決する作業支援者です
- ファン : 上記を含む、一般参加者、関係人口案内所の無料会員
- コーディネーター : 上記の街中関係人口と、里山の集落地域を結びます(登録後、認定講座あり)
- 事務局サポーター : 運営委員会をサポートし、応援するもの(広報支援、事務支援)

※団体協力希望の場合は、別途ご連絡ください! ※正式な名前の使用が可能なほか、ホームページにて名前が掲載されます!

コミュニティミッション(さとまち協定)を結ぼう

「里山」と「街中」で交わす「協定書」です。「里山の課題」と「街中の課題」の両方を解決し、両者が同じ方向に向かって取り組むための共通の事業計画を策定します。ポイントは、事業の期限や役割を明確化し、両者に負担が無いようにコーディネーターが提案します。

ミッション名 誰でもわかりやすいミッション名を掲げます	● ミッション名「ひょうご安心ブランド・枝豆保全ボランティア」(協定)	事業の目的(里山/街中) 里山と街中の課題を整理し、解決方法を示します
事業の実施年月 各年度ごとに整理します	● 事業年度 2020年8月7～13日、10月10日～11月15日	事業の実施場所 対象となる里山の場所を示します
事業主体と役割分担 事業主体(里山・街中)ごとの役割分担を整理します	● 事業内容・スケジュール 具体的な事業内容とスケジュール(実施月日)を整理します	事業中止になった場合の影響と対策 事業が仮に中止になった場合の対処方法を整理します
事業実施後の展開 事業年度以降の対応方法を示します	● 事業実施後の展開 2020年度は、モデル事業として取り組み、その成果をもとに、次年度以降の継続を判断する。	
その他の留意事項等 お互いのマスコミ対応を示すなど、適宜工夫して整理します ※特に、顔写真等のネット掲載について、承諾許可を得ます。	● その他の留意事項等 お互いの活動がマスコミ等に取り上げられた際には、ともに応援拡散することに協力する。	

『コミュニティ・ミッション』シート

ここがポイント!

里山側が「課題抽出」を見出していない場合は、10年先を見据えた課題整理が必要です。場合によっては、地域再生アドバイザーの派遣を活用しよう。

- 県民局の役割
関係人口案内所紹介、コーディネーター派遣、県民局管内の事例提供、里山の適正指導・審査
- 市町の役割
里山側の募集、県と里山の調整(里山側に事務局機能が無ければ、事務局的な調整)、資料準備、会場設営、オンライン会議支援

コミュニティミッション作成に至るまでの打合せ例

約10項目の議題を3回程度に分けて打合せを行います。

街中側がボランティア等個人の場合	街中側がアンバサダー等団体の場合	各回ごとの必要資料
<p>～出席者～</p> <p>ひょうご関係人口案内所(さとまちガイドラボ)事務局、コーディネーター、里山側代表者、担当者、地域関係者、行政関係者(市町、県職員)</p>	<p>～出席者～</p> <p>ひょうご関係人口案内所(さとまちガイドラボ)事務局、コーディネーター、里山側代表者、担当者、地域関係者、街中側関係者、行政関係者(市町、県職員)、アンバサダー</p>	<p>第1回</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 市町(里山) 地域データ、地域の基本構想や基本計画、地域活動がわかる資料、地域マップ、地域パンフレット ● コーディネーター 活動記録報告書、地域カルテ簡易版
<p>第1回</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ひょうご関係人口案内所(さとまちガイドラボ)の紹介 2 里山側の課題の抽出 3 街中側の人材希望の聞き取り <p>第2回</p> <ol style="list-style-type: none"> 4 コーディネーターの紹介 5 コミュニティミッションの策定素案 提案 6 オンラインカフェ等の紹介 <p>第3回</p> <ol style="list-style-type: none"> 7 コミュニティミッションの策定案_提案 8 オンラインカフェ等の設営状況確認 9 里山側での実践活動のプログラム提案 	<p>第1回</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ひょうご関係人口案内所(さとまちガイドラボ)の紹介 2 里山側の課題の抽出 3 街中側の人材希望の聞き取り 4 コーディネーターの紹介 <p>第2回</p> <ol style="list-style-type: none"> 5 コミュニティミッションの策定素案 提案 6 アンバサダー等の団体活動紹介 7 コーディネーター進行による意見交換(場合により現地視察) <p>第3回</p> <ol style="list-style-type: none"> 8 コミュニティミッションの策定案_提案 9 アンバサダー等の活動プログラム提案(当日の行程等) 10 現地状況の視察確認 11 コーディネーター進行による意見交換(場合により現地視察) 	<p>第2回</p> <ul style="list-style-type: none"> ● コーディネーター コミュニティミッション素案、地域課題抽出シート、活動記録報告書 <p>第3回</p> <ul style="list-style-type: none"> ● コーディネーター コミュニティミッション案、実践活動プログラム案、活動記録報告書

※成果品例 策定前→地域カルテ簡易版、地域課題抽出シート、コミュニティミッション、実践活動プログラム、活動記録報告書

コミュニティミッション策定後は、その内容に沿って、活動を進めます。
策定後の成果品例としては、活動記録報告書、youtube用のアップ動画、SNS用の記録写真があります。

はりま里山ホップづくり

Case 1

場所 兵庫県佐用町江川地区

事業年月日 2020年4月～10月



里山

- 事業主体：江川地域づくり協議会
- 役割分担：ホップ体験畑の提供、生産・収穫・管理

■事業の目的

兵庫県佐用町江川地域づくり協議会では、「空き家」や「耕作放棄地」等の集落の課題があり、広域的に課題への対策を図ることが求められている。

そこで、「耕作放棄地」対策として、ビールの原料となるホップに着目し、姫路の活動団体『はりまグリーンラボ』と交流体験しながら、耕作放棄地での「ホップ体験畑」をモデル的に取り組み、はりまの市民で育てたビールの江川ロゴが入ったラベルを製作することとする。



街中

- 事業主体：はりまグリーンラボ
- 役割分担：関連作業の協力、ホップ苗の準備、収穫後の案内

■事業の目的

はりまグリーンラボは播磨全域でみどりを広げる活動を展開し、「はりまで育てたビール」で乾杯するプロジェクトを進めている。

ビールの原料となるホップについては、里山の「耕作放棄地」を活用した畑づくりにより、ホップの収穫量を増やすことを計画している。

街中ではホッププラントを広げ、里山でもホップファームを求めている。



コーディネーターが果たした役割…コミュニティミッションの策定に向けた事前打合せ

江川地域づくり協議会に対して

コーディネーターは、江川地域づくり協議会(11自治会で構成)の特徴を踏まえ、複数課題のうち「耕作放棄地の増加」に対して、アンバサダー(はりまグリーンラボ)と協働して対策を進めることを、協議会全体で情報共有できるように進めた。

はりまグリーンラボに対して

コーディネーターは、はりまグリーンラボにホップ体験畑の候補地を視察案内した。コミュニティミッションについては、江川地域づくり協議会との役割分担を事前相談できるように資料準備を行った。

佐用町の役割

江川地域づくり協議会、はりまグリーンラボがコミュニティミッションを確認する際に同席し、協定内容を確認した。コーディネーターとの連絡調整、情報共有および広報活動を行った。また、県民局とのやり取りを行い、コーディネーター派遣申請を行った。

Schedule 2020

- ① 4月 耕作放棄地掘り起し
- ② 5月 ホップ苗植え
- ③ 6月 草取り
- ④ 7～8月 ホップ収穫
- ⑤ 9月 ビール醸造
- ⑥ 9月末 披露会



成果

佐用町江川産ホップを1.5kg(0.4反)収穫し、佐用町江川地域づくり協議会のロゴ入りビール150本が完成した。また、SNS等で、佐用町江川地域づくり協議会の写真が多く投稿され、地域の名前が広報された。里山側ではホップ栽培のノウハウを入手し、街中側では良質なホップを入手できた。



振り返りとこれからの課題

佐用町江川地域づくり協議会では、次年度もモデル的に取り組む方向で協議が進んでいる。これからの課題は、「ホップの品質向上」「収益に至るまでの販売経路の確保」「地域内での賛同者の拡大」である。

※Fs調査：フィジビリティ・スタディ調査。新規事業などのプロジェクトの事業化の可能性を調査すること。

ひょうご安心ブランド 枝豆保全ボランティア Case 2

場所 兵庫県朝来市上八代区 事業年月日 2020年8月7～13日、10月10日～11月15日



里山

- 事業主体：上八代区、上八代営農組合
- 役割分担：黒大豆枝豆に必要な営農作業指導

■事業の目的

兵庫県朝来市上八代区では、ひょうご安心ブランドの黒大豆枝豆の生産が盛んであり、集落総出で取り組み、休耕田が無いぐらいの活動を行っている。

一方、人口45人、20世帯の限界集落となり、そのブランドを維持する人手の確保が困難になっている。また、集落外からのボランティアの受入を行っているが、長続きしないなどの課題がある。

このことから、街中からのボランティアの受入機会を増やし、人手不足を解消することを目的とする。

街中



- 事業主体：ボランティア
- 役割分担：地域の要望に沿った作業ボランティア

■事業の目的

兵庫県では、里山体験を行いたい街中の人手が一定数存在する。また、ウイズコロナにより、イベントも無くなっており、家族単位での体験機会が大きく失われている。

一方、食の地域情報をダイレクトに里山から入手、発信して、より豊かなライフスタイルを手に入れたい人も多い。

このことから、街中の人々が里山を訪れ、ボランティアで農作業を体験し、ひょうご安心ブランドの枝豆保全と広報に努めることを目的とする。



コーディネーターが果たした役割…コミュニティミッションの策定に向けた事前打合せ

上八代集落に対して

上八代区の担当者がオンライン参加できるように、コーディネーターはWi-Fi状況の確認を現地で行うとともに、オンライン練習会を行った。コミュニティミッションについては、枝豆の収穫、選別時期をスケジュール化し、「おもてなし」の自粛、保険への加入を求めた。

街中ボランティアに対して

コーディネーターは、オンラインカフェの進行を行い、里山側の情報提供を求めたほか、街中ボランティアが行きたくなるように、楽しい運営に取り組んだ。また、交流イベントではなく、作業のボランティアであることを強く説明し、里山側に対応を求めるものではないことも現地で説明した。

朝来市の役割

上八代区、ボランティアがコミュニティミッションを確認する際に同席し、策定内容の情報共有、お互いの広報支援の協定確認、協定の事業年月日の確認を行った。県民局とのやり取りを行い、コーディネーター派遣申請を行った。移住施策など市の取組を、参加された皆さんに紹介した。

① 8月
オンライン・カフェによる
里山側からのよびかけ
8月10日、11日
10月11日、17日
ボランティア活動実施



② 10月
オンライン・カフェによる
里山側からのよびかけ
11月1日、3日に
ボランティア活動実施



成果

上八代区の営農作業のうち、マルチはがし等、1/4程度の作業時間の削減に成功した。また、作業終了後は、ボランティアのほとんどが黒大豆枝豆等の農産物を購入し、前年度より売上があがった。里山側に必要な人手とお金落ちる一方、街中側も自己実現に向けて満足度が高いことがわかった。



振り返りとこれからの課題

上八代区では、次年度もモデル的に取り組む方向で協議が進んでいる。これからの課題は、「ボランティアの参加意欲の継続」とコーディネーターによる「全体運営バランスの見守り」である。

※Fs調査：フィジビリティ・スタディ調査。新規事業などのプロジェクトの事業化の可能性を調査すること。

街中のオンライン交流カフェの取組

街中での交流会をカフェ形式で行っています。事務局サポーターと一緒に運営しています。コロナ禍でもあり、オンライン形式で2020年度は進めていきました。

2020
8/2_{Sun} さとまちボランティアカフェ

Guest Speaker
上八代集落 区長
高品浩さん



Online Cafe

- ボランティアを中心にオンラインカフェを開催。
- ゲストに上八代集落高品浩さんを招いて、上八代集落の自己紹介。
- 限界集落の実情と、ひょうご安心ブランドの黒大豆枝豆の集落総出の活動に、参加者も感動。
- 参加者全員が、上八代集落に「行きたい」と回答しました！

2020
8/20_{Thu} さとまちフォトグラファー・カフェ

Guest Speaker
グリーンバード
姫路チーム リーダー
タケちゃん



Online Cafe

- フォトグラファーを中心にオンラインカフェを開催。
- ゲストにグリーンバード 姫路チームリーダーのタケちゃんを招いて、自分らしい写真の撮り方を解説頂く。
- 「みどりのフォトバトル」という新しい企画を実施。
※「現地に行って写真撮影したい」という審査基準で参加者全員の投票で、チャンプフォトを選定。

2020
12/26_{Sat} さとまちナビゲーター・カフェ

Guest Speaker
加西市西在田地区
ふるさと創造会議
虹の郷 にしありたさん



Online Cafe

- ナビゲーターを中心にオンラインカフェを開催。
- ゲストに虹の郷にしありた(加西市)さんを招いて、加西市西在田地区ふるさと創造会議の実情を紹介。
- コロナ禍で「できたこと」「できなかったこと」を意見交換。
- 西在田地区の課題解決に向けて、集落別に小さなソロキャンプ等を実施するなど、新しい形態の取組についてアイデアが出た。

2021
2/19_{Sat} さとまちアンバサダー・カフェ

Guest Speaker
glaminka佐用 代表兼
クリエイティブディレクター
大野篤史さん



Online Cafe

- アンバサダーを中心にオンラインカフェを開催。
- ゲストにglaminka佐用代表兼クリエイティブディレクター 大野篤史さんを招いて、集落をまるごと宿泊施設にリノベーションする取組を紹介。
- 「glaminka佐用集落 コミュニティを広げる新しい再生のカタチ」について意見交換。
- 参加者が41名と多く集まり、里山での新しいコミュニティビジネスについて複数の質問が出た。

事務局サポーター会議

2020
5/23 第1回



初めてのサポーター招集。本活動の趣旨紹介や参加者交流を通じて、楽しく意見交換。ロゴマークを決定した。

2020
6/20 第2回



2回目のサポーター招集。交流会についてアイデア募集企画。ボランティア・フォトグラファー・カフェの内容を話し合った

2020
10/9 第3回



3回目のサポーター招集。ナビゲーター・アンバサダー・カフェの内容を話し合った。新たな事務局サポーターも集まり、楽しく交流した。

コーディネーターの養成スクール

コーディネーターを養成するため勉強会を実施しました。4回の勉強会を受講後、認定試験を受けて、正式なコーディネーターとして認定されます。2020年度はコロナ禍にあり、会場&オンライン形式で約150名の参加予約がありました。

第1回
2020年
7/19
(日)

全体講演

交流勉強会

「地域への入り方」

地域再生アドバイザー ゲスト:浅見雅之さん

「コーディネーターとは」



Keyword

合意の強さは
共感>納得>理解

【全体講演】 トークの内容

■ 地域へ入ることの本題

- 地域をできるだけみんながニコニコ暮らし続けられる場所にする。
- 地域住民自らの力で自立的かつ自律的な(自分たちでコントロール可能な)地域運営ができるようになることをめざす。

■ 社会的背景

- 人口減少社会では、自治体の成就が減り、行政職員が減ることになる。一方、地域の数是不変なため行政職員の手が回らなくなる可能性が高い。行政だけでは対応できない部分は地域側で対応しなければならない時代が迫っている。
- それは行政による地域への業務の丸投げというよりも「返却」であると理解すべき。かつては地域住民が自らやってきたことを、この百数十年行政に預けてきたものを、地域が取り返すという位置づけであると認識したい。

■ 簡単に言うと・・・

- 自治会全加入、協働の草刈、総出の葬式などの旧来型の地縁社会【地縁社会1.0】
- 「返却」の時代までは、地縁に頼らずにも生きていける社会をめざしてきた。しかし「返却」後は地縁型の社会が再び重要になる。【地縁社会2.0】

■ 地域へ入るポイント

- これからの地域社会では、地域の人全員が自分の意見を自由に表明できて、何を言っても怒られない地域の話し合いを維持し続けられた地域がよりよい地域を実現できる。
- 地域のみんなの納得が何より重要。納得とは「意見の違いを理解した上で同意すること」この納得を得るためのプロセスデザインが地域を支援するものの役割の一つである。合意の強さを整理すると、「共感>納得>理解」となる。「共感:考えが同じだ。理解:内容がわかる。」
- 納得を引き出すために重要なのが「コミュニケーション」。「コミュニケーション力」とは「相手の話を聴く力」と理解すべき。地域の話し合いをよりよいものに改善し、納得のプロセスデザインをしていく上で「相手の話を聴く力」が非常に重要となることを理解したい

▶ トークに対する質問や感想

地域会議のメンバー選定は？

→多くの人が集まった方がより正しい結論が出せることを信じて、参加したい人はみんな集まれるような状態を作ることが大切だと考えています。

否定的な意見への対応は？

→とにかく話を聴くことからしか始まらない。地域には話を聴いてもらいたいという人は多い。特に否定的な意見を言う人にはそういう人が多い。会議には地域をよくしたい人しか出ていないのだから、合意できる場所はあるはず。そういう反対意見に耳を傾けることで、逆に味方になってもらえるようにと考えています。

アドバイザーの引き際は？

→地域の人たちが自らホワイトボードに話し合いの様子を書いてまとめ、送信してくれるようになったら引き際といえるかもしれないと思っています。

地域に入ってから会議の回数は？

→地域の自立・自律的活動を目標とするが、地域は未来永劫続くのでこちらが「何回」と期限を設けることではないと考えて取り組んでいます。

【交流勉強会】 コーディネーターとは

■ コーディネーターの基本的な役割

1. 里山の小規模集落・地域の課題解決を図ること
2. 街中の団体等の課題解決を図ること
3. 里山と街中の団体の共通のミッションを見出すこと
ミッション: 事業化に向けた目標や方向性
4. 街中の人材の個性を把握していること
ナビゲーター・アンバサダー・フォトグラファーボランティア
5. 里山も街中も継続的に応援できる能力があること

▶ 地域に入った時に起きる想定シーン

Scene 1

里山の地元が「良いよ良いよ」と言って【おもてなし】。料理を準備し、街中人材も喜び、イベント終了。

浅見さんの回答: 企画段階なら【おもてなし】をいったんやめるべきです。イベント後に【おもてなし】を続けることの負担について話し合うことも有効です。ともすれば地域の皆さんは善意で【おもてなし】をしたがるので、それは納得した上で「どうしたらそれが続けられるか」という視点で事業を見直すことが重要です。

Scene 2

一人の方がよくしゃべり、他の方の意見を聞けない。みんな黙って聞いていて、15分ほど経っている。

浅見さんの回答: 15分経っていることは多くの方が気づいています。「話長いですよー」と声をかけても大丈夫な信頼関係を築くことが大切です。そうした信頼関係があれば困っている私を助けてくれる人も現れるようになります。



第2回
 2020年
 9/13
 (日)

全体講演

交流勉強会

 「地域カルテ作成のススメ
 ～地域の現状を的確に捉えよう」
 地域再生アドバイザー ゲスト: 柏木登起さん


Next Stage

Keyword

 地域を点ではなく
 「面」で捉えよう

[全体講演] トークの内容

■ 柏木登起のやりたいこと

- 市民社会をどうつくるか。「市民活動」= 市民の主体的な活動すべてと捉えており、市民一人ひとりが自分らしく生きる社会をつくりたいと思っている。

■ これからの地域づくり

- これからの地域づくりに必要なことは、多様な人たちが地域の課題解決の取組を楽しみながら主体的にやっていくこと。そのためには、多様な人たちの「やりたい!」を実現できる組織づくりが必要不可欠である。
- 人口減少や少子高齢化による「担い手」不足や、「世帯代表」を中心とした合議組織による「義務」活動の限界があり、様々な個人も巻き込み、多様な「人」が関わってつくる地域づくり(例: まちづくり協議会)の仕組みが必要である。
- 域外住民が地域に関わってくれるなら、取り入れた方が良く、ウエルカムが良い。それが関係人口である。域外住民が関わられる枠組みを作っていく必要がある。

■ 「対話」の場から主体性が育まれる

- そのため対話の場(話し合いの場)が大切である。例えば、会場でも机のレイアウトを口の字から、アイランド形式に変えることで、対話が育まれる。
- 何でも発言できる雰囲気づくりは、自身の意見を言えることにつながり、当事者意識(主体性)が生まれる。

■ 面で把握するための工夫

- コーディネーターの役割は、地域の現状を的確に把握すること。そのためのポイントは以下の通り。地域を点ではなく、「面」で捉えよう。
- ① できるだけ多くの人と話を聴く(会長以外にも話を聴く・会議前後の雑談も重要)
- ② 地域を歩く。地域をまわる。あえてバスで行く。自転車で回る。
- ③ データや数字を調べてみる(例: 人口、世帯数、高齢化率、災害時要配慮者等)。
★ 集めた情報を整理する = 「地域カルテ」
- ④ 過去の会議内容やワークショップの実施内容などを時系列で把握する。
- ⑤ 地図をつくってみる(例: 集会所、田畑、生活関連施設、ふれあい喫茶やサロン等)

▶ トークに対する質問や感想

地域に関わる期間は?

→ 立場によって様々ですが、概ね「3年」と考えています。1年目は信頼関係を作ることと、意識啓発を行います。2年目は具体的な取り組みを行い、3年目に組織や活動が変化すれば良いと思っています。

何人から話を聴いたら?

→ 話を聴くのは多ければ多い程良いが限度があります。行く限りは最大限できることをやります。地域のことを一番知っているのは地域の方なので、地域を尊敬する姿勢が大切です。

地域に入るアドバイザーの役割は?

→ 地域は、伝統があり、年配の意見が通ることが多いです。地区外だからこそ中立の立場で伝えられることがあるので、第3者の役割が重要です。

地域から複数意見(反対意見も含めて)が出て、どれを絞って良いかわからない場合は?

→ 多様な参加者が集まる場があり、多様な意見を出せれば、地域が進むべき正しい方向に流れていくと思っています。

女性が参加するコツは?

→ ワークショップや座談会の場合、案内文などで「子連れ参加OK」と書くなど、誰でも参加OKであることをしっかりと示すという工夫が大切です。若手だけ、女性だけの意見交換の場や勉強会などを実施する場合があります。その他、防災の取り組みなどは女性も参加するきっかけになりやすいです。

[交流勉強会] 地域の課題を知ろう

■ 「地域の課題を知る」ポイント

1. 一方向だけで地域を捉えずに、色んな角度から地域を見よう

俯瞰して地域を捉えるために、地図を活用しましょう。拠点の場所や集落の位置などを確認してみることも大切です。

2. できる限りたくさんの方の意見を聞こう

地域のことをいちばん知っているのは地域の方。話せば話すほど課題が見えてきます。ただし、一部の人の意見だけでわかったつもりにならないように気を付けましょう。地域の人に「3人くらい紹介してください」といって紹介してもらい、輪を広げていくのも情報を集めるコツです。

3. 話を引き出すには「雑談」のコミュニケーションが大切

雑談によって人間関係も作れますし、大切な情報が隠れていることもあります。「褒める」というコミュニケーションから、関係づくりをすることも大切です。

4. 把握した課題が的確かどうかを確認しよう

集めた様々な情報から課題を設定します。しかし、その設定した課題が常に正しいとは限りません。時にホワイトボードに可視化して地域の方と確認したり、さらにヒアリング調査をしたりしながら、常に視野を広くもって課題が的確かどうかを確認しましょう。



運営側の解説

コマポイント

地域に「入り」「しらべ」「まとめ」、コミュニティミッションを「つくる」といった一連の流れについて4名の地域再生アドバイザーが、各段階ごとに専門的に講演頂きました。1回あたり4時間の勉強会を運営し、各ゲストからより深く学べるためにアクティブラーニングを駆使しました。

コーディネーターの養成スクール

第3回
2020年
11/14
(土)

全体講演

「地域からみたアドバイザーとは？」

地域代表者×地域再生アドバイザー
地域再生アドバイザー ゲスト:松原永季さん



Keyword

地域課題の重みづけと観察する立ち位置が大事!

交流勉強会

コーディネーター実践講座
「つながりを生み出す、話し合いの技術」

【全体講演】ゲスト×地域代表者×地域アドバイザー



ゲストの質問

アドバイザーの入り方とは?

八代おもいやりネット (豊岡市)



初対面の第1印象が良かった。気さくで堅苦しいというアドバイザーの印象が変わった。

西在田地区ふるさと創造会議 (加西市)



市が絶対大丈夫と勤めてくれた。会が進むにつれて、みんなが前のめりになっていた。結果的に私が一番前のめりになった(笑)

アドバイザーの支援



(八代)事務局の明るい雰囲気、ワークショップ道具(付箋・ペン)を準備できた。(西在田)現状を教えてくださいと求めたが、役員が誰も喋ろうとしなかった。3年は少なくともかかると感じた。

地域事務局の変化は?

「はじめの第1歩計画」をつくる時には、お互いが思っていることをまとめて、たたき台をつくってくれた。事務局の苦手な部分、地域の弱いところをサポートして頂けた。

いつも次回の会議の宿題を出す。事務局だけなら、言い出せない。事務局案をつくる必要がなくなった。そして、完璧なものをつくらなくて良いと言ってくれる。誰もが手を加えられるような、まちづくり計画書の作り方を教えて頂いた。

事務局が自分たちで計画書をつくることを重視した。計画書をアドバイザーが作るものではなく、自分たちが自分たちの地域のことを自分たちの言葉で策定するもの。様式を渡して、監修を私がするから、データ入力は地域で行うように進めている。だから、今回の両地区は、自分たちで計画変更もできるし、編集も可能。

ワークショップでのポイントは?

最初のワークショップの写真クイズ(脳トレ)がとても楽しかった。山の上の限界集落に行かない気づきがみんなにあった。事務局に●日までに、データ入力するように求められ、のちのち、事務局を育てられてきたと感じるようになった。

3回のワークショップは大成功。兵庫県立大学の学生が入って、地域マップをつくるように段取りしてくれた。地域の人が大学生に教えたがる空気も作ってくれた。新たな魅力の気づきもあり、地域マップを今でも使っている。

第1回を集落ごとでテーブル構成し課題を抽出した。第2回以降で校区での年齢別テーブル構成としているところが運営のポイントである。集落課題に対して、広域的に年齢別対応を考えることができた。兵庫県立大学の専門ファシリテーションをもった若者を入れることによって、多様性をもたらしした。

外部人材との関わり方は?

八代に地区外から手伝ってもらうには、時間がかかり、交通・宿泊の費用が心配である。八代の土産として取り組んでいる八代オクラの種まきに参加していただければ有難い。その後の成長をホームページで見てもらえればより有難いです。

加西市でも移住者がいる地区で、地区外からの移住や参画にも対応できる、程よい距離感のある地区である。移住者と懇談会をする機会もある。関係人口の交流の中で大事だと思っている。

外部関係者として、アドバイザーでも、コーディネーターでも大事なことは、「地域の想いを尊重すること。事務局がどのように地域の方々と話しているか、説明をしているか、しっかり「観察」することが重要である。地域外の方は「自分のやりたいことをやろうとする」のではない。「地域の想いを尊重して、作業を支援」することが大事。

【交流勉強会】つながりを生み出す、話し合いの技術

Step 1 グループ分け(アイスブレイク) ←緊張を緩め、安心して話せる関係をつくるため

A4用紙に趣味を記入し、相互確認して同じ傾向の3~4人でグループづくり。オンライン参加者は事務局でランダムにグループ分け

Step 2 「聴く」コミュニケーション ←安心して聴く距離、向き、空間、表情、機会を学ぶため

聴き手・話し手・観察者に役割分担し、2分×3パターン×2回(聴き手・話し手交代)実施 ※3パターン(最初の態度「言葉を発さずできるだけ聞き出す」、2回目の態度「言葉も身振りも使って、できるだけ聞き出す」3回目の態度「できるだけ聞こうとしない」)

Step 3 「気づき」の見える化 ←意見の情報共有と参加意欲向上のため

各自A4用紙に記入。全員でホワイトボードに貼りつつ、確認 ※オンライン参加者はチャットに記載、全員で確認→主な意見を会場に紹介

Step 4 全員参加による「重み付け」 ←アイデアの軽重の確認と収束方法の一つとして

他の人の気づきも含め大切な内容に1人3票でシール投票。結果を全員で共有。オンライン参加者はチャットに再記入。傾向を会場に紹介

Step 5 少数意見のフィードバック ←少数派を取り残さないため

全く投票されていない意見を確認、共有

Step 6 振り返り ←再度情報を共有し、気づきを深めるため

松原さんがPPTで全プロセスを振り返り

「気づき」について

- ・おもいやり
- ・マスクだからこそ視線も
- ・しゃべりたい気持ちもぐっ
- と我慢することも必要
- ・ニコッと笑顔
- ・無意識に聴いていない
- ・目を合わせる大切さ



Last Stage

第4回
2021年
1/23
(土)

全体講演

「地域の攻めの事業」

アンバサダー事例を踏まえて
地域再生アドバイザー ゲスト:井原友建さん



交流勉強会

コーディネーター

「コミュニティ・ミッションを掲げよう」

Keyword

6W2Hで
地域の攻めの事業
を考えよう

【全体講演】ゲスト×アンバサダー事例 ※アンバサダー：特定集落とコミュニティビジネスをする団体

▶アンバサダー事例：株式会社 glaminka 代表兼クリエイティブディレクター 大野 篤史さん

- グラミンカ=グランピング×古民家を意味。2017年に2人で設立した会社(大野さんは元々小学校の先生)。大阪から2時間圏内の神河町と佐用町で実施。プロと共にDIYで施工。
※長い間人が住んでいない集落を、街中と里山地域の方々が交流できる一棟貸切の宿泊施設に変えた取組。
- 宿泊者の良い反響の理由【①あこがれをつめこんだデザインとサービス②地元の方との交流】
- オープン前の交流を重視。大きな会社ではない魅力で、6か月かけて共同生活。施工チーム、インターンシップ、ワークショップ参加者が集まる。素人と大工が生活を共に集落再生。
- 1週間のスケジュール。施工日が5日(2h×4)。部活の日が1日。休み1日。※部活の日：真剣に遊ぶ日(梁部、サウナ部、山菜部、ピザ部)還元祭イベントもある。【可能性に満ちたプロジェクト】



共同生活や資金繰りは？

→食卓当番制。室内でテントを持たせました。インターン生は労働対価を経験値で。施工チームに対しては必要な対価を準備しました。

心構えは？

→熱い想いを伝え、グラミンカが、儲けることでは無く、多くの笑顔がたくさん生まれることを強く意識しました。

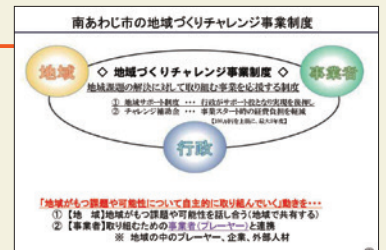
■ 井原さんから質問

「どうして神河町と佐用町を選んだのか」

→お客さんが楽しむ風景が想像できた。移住している方がいるかを聞き取る。新しい風が吹いているかどうかを聞く。役場も前向きに対応。そのタイミングで、プロジェクトの確信に変わる。

▶アンバサダー事例：南あわじ市役所市民協働課 露本 和也さん

- 南あわじ市の地域づくりのキーワードは「食」×「観光」で、1次産業が観光に結び付く。
- 市政方針として、小学校区単位での地域づくり協議会を設立し、「対話と行動の行政」を実現し、地域が自主的に取り組む動きを行政が後押しすることとしている。
- 外部人材を入れるにあたっての支援「コーディネート」①地域土台を固める②どの部分を外部人材に頼るか③地域と外部人材の調整(通訳)
- 献上鯛のまち「丸山地区」事例で紹介・・・①アドバイザー支援による構想整理(ブランディング・コミュニティカフェ)②半年かけて体制強化。頼ることを総意共有。協議会は地域の傘「自治会に広げる存在」③地域づくりチャレンジ事業認定(外部人材による特産品ロゴ、干物レシピ作成)



外部からの発意は？

→地域の病院からの実例があります。

採択後の地域の自立は？

→事業を始めて 3年間しか経っていないので、今後の検証が必要です。

■ 井原さんから質問

「行政の立場から注目した点」

→地域と行政が同じ方向に進めることの協働力。行政が、人材調整支援、経済的支援(制度設計)、PR広報支援をしているのは大きい。



井原さんから 「外部人材」の解釈の仕方と、「攻めの事業」の起業の留意点

【地域側の階層構造と、外部人材の捉え方】

- ・外部人材とは、“人”だけではなく、“組織”“事業体”も人材。上手くやっていくには、名前を覚える、親しき仲にも礼儀あり。地域本位。
- ・「外部」の捉え方が重要。自治会・集落(行政区)にとっての外部は、小学校区も対象。生業を持つ外部人材の方が、情報、人脈が豊富。
※外部人材が企画を持ち込むと、『ハレーション』を起こす場合が往々にしてある

【“攻めの事業”を仕掛けるために、地域活性化の種(企画)を育てるには？】

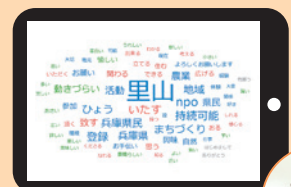
- ・地域活動を企画し実現するためには、6W2Hで“攻めの事業”を考えることが必要。
Who : だれが。人物。行動主体/**What** : なにを。内容。操作対象/**When** : いつ。時間。タイミング/**Where** : どこで。場所。舞台。**Why** : なぜ。なんのために。目的/**How** : どのように。いかにして。手段。実現方法/**Whom** : 誰に。年齢層。都市住民か地域住民か。**How much** : いくらで実施するか。予算。

登録者の分析

👉 コマポイント

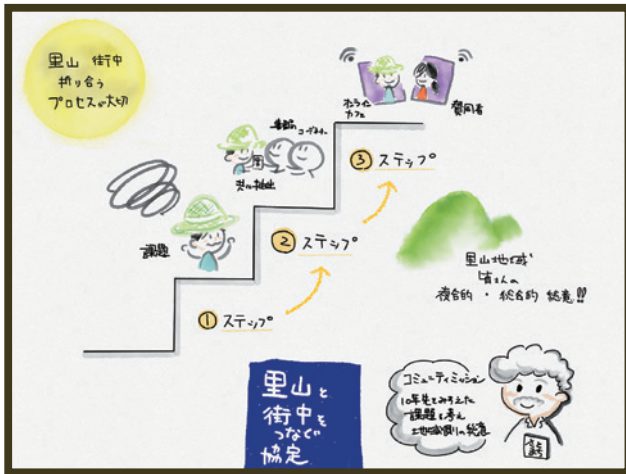
ひょうご関係人口案内所の登録者メッセージを、AIテキストマイニング分析した結果、「里山」が最も特徴的な言葉で出現頻度が高く、県内の多自然地域を表す言葉として最も認知されている。次に「兵庫県」の出現頻度が高く、生まれ育った「兵庫県」を応援したいという郷土愛がみられ、続いて、「農業」「持続可能」「まちづくり」が続き、農業ボランティア等で持続的に地域を応援したい意向が強く伺える。県の関係人口の潜在は27万人と推計されており、今後も登録者は増加することが予想され、今後の広報戦略が重要である。

「地域との関わりアンケート調査(全国15万人web調査)」国交省(R2.10)
地域へ直接寄与を求める者(推計) 全国:約625万人、兵庫県:約27万人



AIテキストマイニング分析





ひょうご関係人口案内所 ～さとまちガイドラボ～

発行：兵庫県ふるさと応援交流センター 令和3年3月

編集：兵庫県地域再生アドバイザー
兵庫県企画県民部地域創生局（地域振興担当）
神戸市中央区下山手通 5-10-1
電話 . 078-362-9008